2018 年 4 月 3 日
産業技術総合研究所

2018 年 3 月 14 日および 3 月 28 日の上空からの観察（概報）

新燃岳の火口内を上空から 3 月 14 日および 28 日に観察した。火口縁からあふれ出た溶岩は前進し、その幅も広くなりつつあるのが確認された（図 1、２）。3 月 25 日に発生した火砕流の流下域内では、多数の立木状の樹木が認められ、それら樹木には延焼の跡などは認められなかった（図 3）。そのため、火砕流の温度は比較的低くかつ勢いも弱かったと考えられる。また熱カメラ映像から、火口中央北側付近、火口縁から溢れ出した舌状の溶岩縁付近、25 日の火砕流の火口付近が特に高温であることが確認された（図 4）。

3 月 14 日撮影

3 月 28 日撮影

図 1　火口北西から望む 3 月 14 日（上）と 28 日（下）の溶岩の様子。
28 日のほうが、火口縁を超えた舌状部分の溶岩が写真手前に前進している。

3 月 14 日撮影

3 月 28 日撮影

図 2　火口西南西から望む。
新たに火口縁を超えて前進しつつある溶岩が認められた（丸で囲んだ部分）。

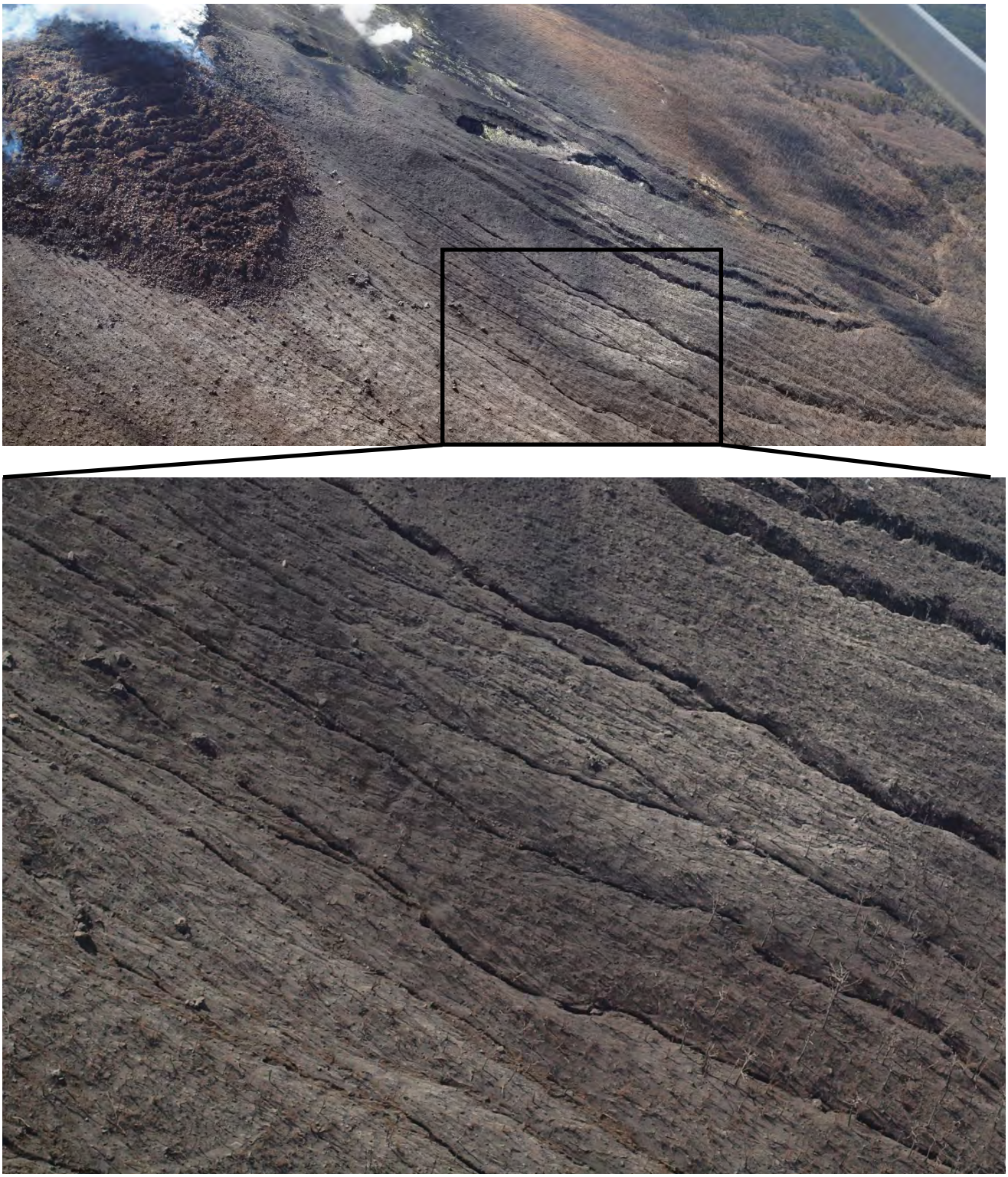

図３　25 日に発生した火砕流の堆積域（上）とその拡大（下）
白みがかった部分が、火砕流堆積物が堆積している地域。その地域内のすでに枯れ死している立木状の樹木の多くは倒れていない。

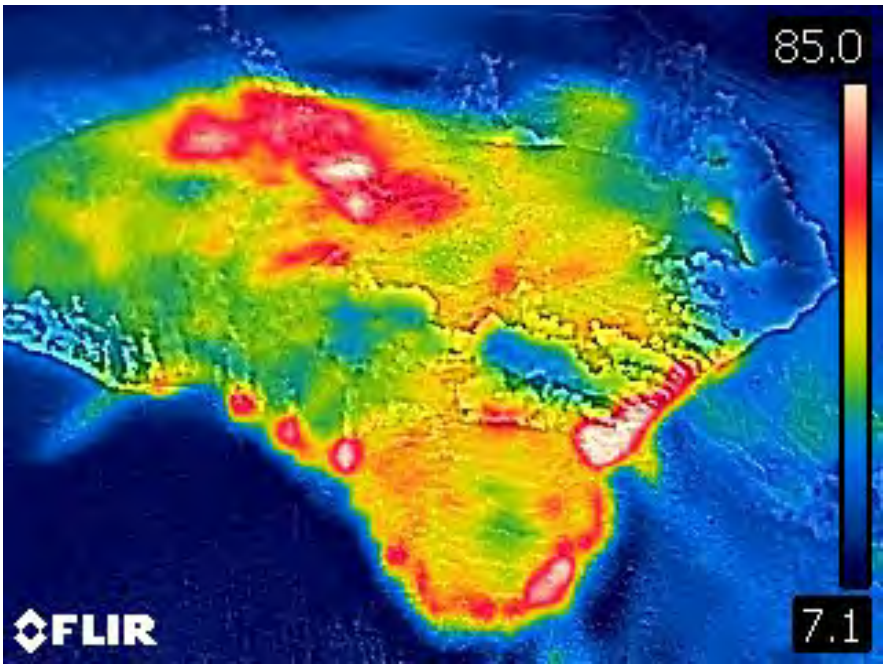

図 4　3 月 28 日の熱カメラ画像（北西から）
火口中央北付近，火口縁から溢れ出した舌状の溶岩縁付近，25 日の火砕流の火口付近が特に高温である。